

土部弘の文章表現論

中島 一裕

- 0 はじめに
- 1 土部表現論の特色
- 2 土部の文章表現論の主要分野
- 3 後期の土部表現論
- 4 語句・構文の選択・配列と「叙述層」
- 5 「叙述層」論の展開

0 はじめに

はにべひろし
土部 弘 の表現研究は、戦後の文章研究ないしは表現研究隆盛の風潮の中でスタートした。

当時は時枝誠記が国語学の研究分野として「文章論」の領域を開拓すべきだと提唱したことを受けて、国語学研究の中で、新たな文章研究の展開が図られようとしていた。また、国語教育の分野でも、新たな表現、読解の基礎理論としての文章理論、表現理論が求められていた。

こうした風潮の中で土部は言語表現の理論整備を進めようとした。

土部の主要な活動の舞台は、この表現学会であったが、とりわけ松永信一、今井文男、塚原鉄雄、蓑手重則らの影響がうかがえる。また、国語学、日本語学の分野で「文章論、文体論」の分野の研究者との間での交流、影響関係があった。

土部の文章研究は、いわゆる「文章論」研究のプロパーとしてその各分野にわたるが、ここでは、土部の残した研究を概観した上で、とくに文章作品の表現論的

解明の方法論としての「叙述層」論に焦点を当て、これをどのように継承し、発展させてゆくことができるかを探りたい。

なお、本稿で文献に言及する場合、土部弘著『文章表現の機構』は、『機構』と略記し、引用箇所、言及箇所のページ数を記した。その他の文献については、著者の姓と刊行年とを示し、本論文末に〔引用参考文献〕の一覧を添えた。

1 土部表現論の特色

土部弘が目指したところは、ことばがじっさいにどのように運用されて人と人との間に言語的伝達（表現、理解）が成り立つのかを明らかにすることであった。時枝誠記の「言語過程説」といういい方を借りると、ことばの表現、理解の過程を明らかにするためにはどんな要素がどのように関連しあい、どんな経過をたどってことばという形の実事が生み出されると考えればいいのか、を明確にすることであった。

こうした前提に立って土部が展開した表現論の特色は、次のような点にある。

一つめに、自らの表現論を「文章表現論」と呼んで、文章作品の表現、理解にかかわる諸問題の解明をめざして体系的な説明原理の構築をめざした。その説明体系は、機構論的であり、言語表現が成立

するために必要な諸要因と、それらが相互に関連しながらまとまったことばを生み出す過程とが中心になっているところに特色がある。

二つめに、土部表現論においては、生み出されたことばの一体性が重視されている点があげられる。ここでいう一体性とは、意味的な統一性であるが、土部表現論においては、表現され、理解されることばが、語、文、連文という単位を超えて、いかにして意味的な一体性を獲得するのが問題とされた。このことから帰結する第三の特色として、言語表現の機能の重視があげられる。土部の考え方では、ひとまとまりのことばは、それだけで一つの単位として文章になりうるが、それが他のまとまりを持つ単位と関連する場合、それぞれの単位がより大きな意味的統一に向けた機能を発揮することになる。この場合、単一の機能を帯びた単位的な文章が「単文章」とされ、単文章どうしが機能的に連関してしくまれた文章が「複文章」とされる。こうして「単文章」について「文章の基本様式」を見出したうえで、そうした「単文章」の複合体・混質体としての「複文章」を解明するという手順が取られた。

さらに、第四の特色として、国語科教育への配慮があったことが指摘できる。土部表現論は、つねに国語科教育の実践原理であることが目指されていた。そのために、言語表現の諸要因間の関連性を示したり、表現論の主要構成要素を分類したりする際には、簡略な図式化が図られ、また、漢語の用語には必要に応じて対応する和語が添えられている。

ただ、こうした表現学説は、それが体

系的であればあるほどその全体が見とおしにくいという逆説的な性質をもっていると思われる。その原因は、表現論の対象であることばが、抽象化された資材のレベルのものではなく、いままさに意味を生み出そうとする、具体的な運用レベルのものだからである。さらに、ことばの階層から見ても、文章・談話といった具体的・個別的な言語作品は、音声、単語、文というレベルを含みながらそれらの上に立つ最大の単位である。こうした単位のあり方が、表現論の体系を見えにくくしているといえる。

2 土部の文章表現論の主要分野

土部の文章表現論は、具体的には、次の分野に及んでいる。

①文章表現の機構

土部表現論の最大の特色は、機構論にあるが、その「言語表現の機構」は、次のように概括される。まず、言語表現を成立させる要因として「送り手」、「受け手」、「素材」の三要因（または、これに媒体としての「言語」を加えた四要因）が指定される。言語表現が行われるにあたって、送り手は、自分自身をとらえ直し（これを「自分」とする）、受け手をとらえ直し（これを「相手」とする）、素材をとらえ直す（これを「表現内容」とする）。こうして言語表現行動が行われ、その結果として「言語作品（談話・文章）」が生み出されるが、その内容を形成しているのは、表現内容およびそれに対する話し手・書き手の表現意図、さらに、相手に対する表現意図の三者である。土部は、言語化され、言語作品に内在している限りでの「表現内容」を「題材」、「表現内容」に対する

表現意図のあらわれを「趣意」、「相手」に対する表現意図のあらわれを「要求」と呼んだ。こうして、一つの「言語作品（文章・談話）」とは、「題材」「趣意」「要求」の緊張関係によってまとめられた意味的統一体、ということになる。さらに、土部は、話し手・書き手の表現意図が表現態度にも反映すると見、その言語作品へのあらわれとして、「視点」「立場」「調子」の三つを数えて、これらの関連性を下記の「図表 表現意図のあらわれ」のように図式化した。

これらが統合されて言語作品（談話・文章）の成立に至る反省と表現の過程、さらには、言語作品の理解を加えた過程を、土部は現実場面、表現場面、言語場面、理解場面という四つの場面が継起する過程として、独自の機構論にもとづく表現過程論を展開した。[『機構』p26-p33、p73-p74]

②文章の統一的意味の把握

土部表現論において一つの言語作品の意味的な統一性は、次のように分析され、定式化されている。

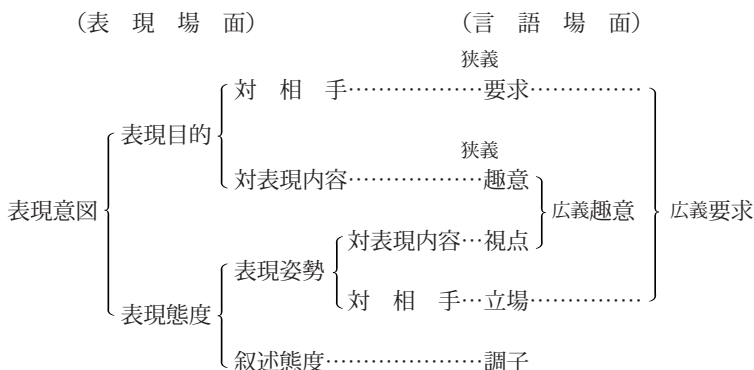
ひとまとまりの文章は、「題材」「趣意」「要求」の緊張関係によってまとまりを持つ意味的統一体である。こうした文章作品の意味統一の中心を「主題」と呼ぶと、「主題」は、題材の表現に趣意・要求を合わせたものであるということになり、さらに簡便に「題材」の中心になっているものを「話題」と呼ぶと、「主題」は、「話題×趣意（×要求）」という形で分析できる、ということになる。

土部表現論では、こういう形で文章の意味的統一のあり方の明示化が図られるとともに、錯綜した用語法の整備が目指された。[『機構』p74-p75、p107-p109]

③文章の構成論

土部表現論においては、文章構成論にあたるものに三通りの観点からのアプローチがあった。

一つは、様式論的構成論ともいえるようなものである。土部は、単一の機能だけで成立している「単文章」に、「論文文・実証文・解釈文・記述文・評価文・形象文・表出文」の七つの基本様式を認定し、具体的な文章は、多くの場合、こうした



図表 表現意図のあらわれ

単文章が並びあったり、融合したりした「複文章」として成立すると考えた。[『機構』p88-p97]

二つめは、文章の意味的統一のあり方から見た文章構成論で、ここでは「主題（話題、趣意）」のあり方、すなわち話題設定の有無、趣意の集注・散在・潜在、主題の顕在・陰在などによって「文章構成の型」を設定しようとするものである。こうした観点から、土部は、五類十四種の類型を認定している。[『機構』p123-p132]

三つ目に文章の展開形態としての構成をとらえようとするものである。およそ、ことばの表現には、ことばの流れを先へ進めようとする力とその流れにまともりを与えようとする力とが働くが、土部は前者を「文脈（流れ）」、後者を「結構（構え）」として、この二面から文章構成をとらえようとした。[『機構』p175-p176]

④ 叙述を基礎づける構文論、連句論・連文論の整備

土部は、以上のような文章表現論の体系的理論整備を進める一方で、表現の具体相である叙述レベルについての整備を進めた。構文レベル、連句・連文レベルの整備であるが、構文については、「文の性質上の種類」に二類八種を認定し、二文からなる「文の関連的地位」に七類十四種を認定するなどした。[『機構』p155-p166、土部1964・1966・1971]

こうして土部の文章表現論の体系的な枠組みが形成されたが、その全体的な概要は、『文章表現の機構』にまとめられた。

3 後期の土部表現論

『文章表現の機構』ののち、土部表現論

の中では、「叙述層」の問題が大きなウエイトを占めるようになった。

「叙述層」というのは、叙述された語句や文が、文章中でいくつかの層序をなして表現的機能を帯びているという考えかたにもとづいている。こうした考えかたは、当初の「単文章」から「複文章」へとという考えかたの具体的な適用であるとともに、叙述のレベルと文章構成のレベルとをつなごうという意図によるものと考えられる。

叙述層研究の中ではつねにその図式化が図られたが、従来の連文研究が文の隣接関係の分析にとどまり、平板なものになりがちであったことを超えて、ことばの表現を立体的にとらえようとする意図のあらわれであったと思われる。[土部1976 a・1985・1986]

また、「叙述層」研究の各論として、概略的な叙述すなわち「総叙」と、細密な叙述すなわち「細叙」との関連性[土部1973]、「事態描写」を中心にした叙述によって成り立っている文章作品の叙述層の分析[土部1978]、文章様式と叙述層との関連[土部1985、1986]といったことがらを取り立てられた。

また、その一方で「叙述層」を特徴づける構文の機能が上げられ、叙述層論の基礎研究としての構文分析がなされた。土部はこれを「表現文法論（基本文型論）」と呼んでいた。[土部1985、1988]

さらに、この時期には、こうした表現、理解の理論的考察の国語科教育への応用が図られ、「叙述—構成—主題」の関連性を見とすための表現・読解スキルの開発が行われた。[土部（編著）1992]

4 語句・構文の選択・配列と「叙述層」

ここで具体的な文章作品の検討を通して、土部表現論が「叙述層」という考え方を中心に据えるようになったのかを見ておこう。取り上げる事例文は、芥川龍之介の「蜜柑」である。この作品は、全8段落58文からなる小品であるが、掲出するのは、その第6段落(第④②文～第⑤②文)である。この作品の前半部の内容は、次の通りである。「言いようのない疲労と倦怠とに包まれていた『私』^{わたくし}は、横須賀駅を発車する汽車の二等客車に乗って、発車を待っていた。やがて、汽車が動き出そうとする時、一人の小娘が『私』の客車へ入ってきた。膝の上に大きな風呂敷包みを抱いた手には三等切符が握られていた。いかにも田舎者らしい小娘の下品な顔だちと不潔な服装に、『私』は嫌悪感を抱いていた。」

〔事例文〕

④②汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。④③踏切り番の近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旛のうす白い旗が懶げに暮色を揺っていた。④④やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切の柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。④⑤彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。④⑥そうして又この町はずれ

の陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。④⑦それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分からない喊声を一生懸命に迸らせた。④⑧するとその瞬間である。④⑨窓から半身を乗り出していた例の小娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢よく左右に振ったと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。④⑩私は思わず息を呑んだ。④⑪そうして刹那に一切を了解した。④⑫小娘は、おそらくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懷に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。
(芥川龍之介「蜜柑」)

土部は、『文章表現の機構』の中でこの部分の表現の特徴を次のように見ている。「(注、この事例文は、)『視点』が作中人物『私』の心情の動向・転換にあつて、それが事態描写のいわば展開軸となっている文章作品である。叙述態度のあらわれである『調子』も、多分に情動的である。前半に流れている暗い情調は、『④②貧しい、④③見すばらしい、ごみごみと、狭苦しく、懶げに、④④蕭索とした、④⑤押しすくめられた(かと思う程)、④⑥陰惨たる、④⑦いたいけな』というような、風物ないし人物の状態描写に用いられた、語句の配列からかもしだされるところが少なくない。後半には、『④⑨勢よく、忽ち、心を躍らすばかり、暖かな、ばらばらと、④⑩思わず、

⑤1刹那に』などの配列に明るくはずんだ『調子』が見られる。』（『機構』p86-p87）
このような語句の選択・配列のしかたに暗から明への調子の転換があると見、これによって、この作品の主脈が思考論理よりも人物の情動にあると見る見方につながってゆく。

「蜜柑」を構文の面から見ると、しばしば受身態や漸進相と呼べる句末・文末表現が用いられていることが注意される。「②9ふと何かに脅かされたような、③1せわしく耳へはいつて来る、③3両側の山腹が、間近く窓側に迫って来た、③9この煙を満面に浴びせられたおかげで、④9ばらばらと空から降って来た、⑤5朗らかな心もちが湧き上がってくる」などがそれであるが、こうした句末・文末の配列のしかたも、視点のある「私」の情動のあり方をきわだたせている。こうした叙述の特徴をふまえて、土部は、この事例文の文脈と趣意の関連を次のようにとらえている。

「この文章作品の主脈をなすものは、「思考論理的な文脈」ではなくて、「事物論理的な文脈」を含んだ、情動的な「心理的文脈」である。（中略）事物論理上——車中にある「私」の「見かた」（視点）においては、蜜柑は自分のがわ（④9車窓）からむこうがわ（④9子供たちの上）へ「降って行った」ものであろう。が、心理上——「懶げ」な「私」の「感じかた」（視点）においては、蜜柑は「心を躍らすばかり暖かな」ものとして「空から降って来た」のである。「私の心には、ある得体の知れない朗らかな心もちが湧き上がって来るのを意識した」（第7段）のである。」（『機構』p85-p86）

土部は、この「蜜柑」に見られるような叙述と文脈・趣意との関連性すなわち、語句・構文の選択・配列のしかたが、叙述の「調子」「文脈」を規定し、それが文章の「趣意」の認定につながるという見通しについて、次のように構想していた。

叙述態度のあらわれとしての「調子」については、まず、記述・描写や説明・物語が、概略的であるか細密にわたっているか、そして、それらがどのように関連づけられ配列されているか、というようなことがらが、とりたてられなければならない。また、語句の選択・配列についても、さらに、叙述層を特性づける各種の語句群がとりたてられ、同じく、叙述層を特性づける各種文型の選択・配列についても、とりたてられなければならない。（『機構』p87-p88）

国語科教育の中では、しばしば「叙述に即した読み」が求められる。文学の科学を志向し、それによって文学作品の読みをたしかなものにしようとした西郷竹彦は新美南吉の「ごんぎつね」の作品構造を分析する中で、次のように述べている。

（注、新美南吉の「ごんぎつね」の）作品の筋（シュジェート）とは、読者にとってごんぎつね、および兵十という人物のイメージと性格がしだいにあきらかとなっていく過程であり、両者のおかれている状況と両者の関係のはらむ意味があきらかにされていく過程であるということができます。けっして、事件の筋と同一視してはなりません。すでに前にも述べた

とおり、事件そのものにとっては無関係なくもの・こと〉でも、形象相関の展開にとってはそれぞれ重要な意味をになって在ることを忘れてはなりません。(中略)筋とは作品のイメージと意味がしだいにあざやかとなり、あきらかになり、ふかまっていく過程であるからです。事件の過程ではないからです。

作家は主題を形象相関の筋として展開するのです。ですから筋をとらえるということは結果において主題にせまるということになるのです。(西郷1968、p178-p180)

ここで、西郷が「作品の筋」というのは、土部のいう「結構(プロット)」に当たるが、それは、「(人物や人物間の)状況・関係のはらむ意味があきらかにされていく過程」であって、けっして「事件の筋」すなわち「文脈(ストーリー)」と同一視できるものではない。したがって作品の筋(プロット)を押さえるためには、事件の過程(ストーリー)にとっては無関係なくもの・こと〉であっても、「形象相関の展開(プロット)」にとっては、それぞれ重要な意味をになって在ると考えるべきだ、というのである。このような見方から、西郷は、作品の筋(プロット)とは、「作品のイメージと意味とがしだいにあざやかとなり、あきらかになり、ふかまっていく過程である」というのであるが、西郷のいう「作品のイメージと意味の過程」をとらえることが、「叙述に即して読む」ことだ、ということになる。こうした西郷の考え方は、土部表現論に通底するところがあると思われるが、土部の「叙述層」という考え方は、叙述に即しながら

作品の構成に迫るための方法論を提供するものということできよう。

5 「叙述層」論の展開

土部は「叙述層」という考え方を深化させるためには、その基本的な枠組みを明確にすることと、それを支えるための基礎分野の整備必要だと考えていた。

基本的な枠組みとしては層序の基本的な階層化と文章様式別の対応がもっとも重要な課題であった。土部は、叙述をいわゆる客体的表現(記述・描写)と主体的表現(説明・評釈)とに二分することからはじめ、基本的な枠組みについて、次のように説明している。

物語・小説などの芸術的文章では、対象表現が上層に位置し、叙述者表現が下層に位置する。通常、「人物描写」「事物描写」「説明」「評釈」という「叙述層」によって構成される。「人物描写」は、ものごと本位の描写ほど上層に位置するように、「談話描写・動態描写・静態描写・心中描写」に四分され、「事物描写」も「動態描写・静態描写」に二分される。(土部1985)

土部は、こうした枠組みを基本として、「総叙」(概略的叙述)と「細叙」(細密な叙述)との関連性や「事態描写」本位の叙述層の特徴の分析などの考察を行った。

ただし、こうした叙述層の認定は、どこまでも相対的なものであるという確認が必要である。叙述の中に置かれたことばは、文章の構成意識、主題意識に裏付けられながら、いわばこれを下から支えているのである。このことから、叙述の

中に置かれたことばの表現機能は、図式的、絶対的に決定されるのではなく、上位概念への組み込みをにらんで、相対的に認定されるものである。

言語理論から出発して文学作品の科学的解明をめざしたロシア・フォルマリズムでは、「異化の手法」が重視された。磯谷孝によると、「異化の手法」とは、「物に馴染みすぎて味われなくなった言葉を味われるようにし、言葉の感触を通して生の感触を回復するために、見慣れた言葉を見慣れぬ言葉に置き換える」手法であるされ、その手法の適用に関して、「言語は階層構造をなしていて、各レベルが異化の手法適用の対象になりうる。その場合、どのレベルに重点が置かれるかによってテキストの性質は多分に変ってくる。(中略) こうした、主要特徴としての手法をフォルマリストたちは、主調音と呼んだ」とされる。^{ドミナント}〔ロトマン 1979の「解説」参照〕

ここでフォルマリストたちのいう「言語の階層構造」というのは、必ずしも叙述に見られる階層のことではなく、広く言語の単位間に見られる階層のことであろう。しかし、ことばの表現過程においてことばの各レベルが異化の手法適用の対象になるという見方は、叙述層の考え方に通底するものである。そして、こうしたフォルマリストの^{ドミナント}ことばを借りると、叙述上の「主調音」を見とおすことが、叙述の層序に見とおしをつけ、これにまとまりを与えることにつながるのである。

今後、土部が構想した「叙述層」という問題提起を受けて、これを展開するため

には、次のようなことが課題になろう。

- (1) 「叙述層」を基礎づける語句・構文自体のあり方をどのように整備すればよいのか。
- (2) 文章の様式が語句・構文の選択・配列のしかたとどのようにかかわっているのか。
- (3) 表現意図のあらわれとしての「視点」「調子」「立場」が、語句・構文の選択・配列のしかたとどのようにかかわっているのか。

まず、(1) については、特に、「文の叙述機能」についての厳密な検討が必要である。土部は、「趣意」「要求」の種別にもとづく「文の性質上の種類」として「認定文、疑問文、質問文、命令文、感動文、応答文、呼掛文、反応文」の二類八種を示した〔『機構』p155-p156〕。中島は、土部の「認定文」を細分し、「対象のありよう・認知のありようから見た文類型」として五類二四種を数えたことがあった〔中島 1994〕。事態の描写・記述に用いられる文、事態の説明・評釈に用いられる文の構造と叙述機能との対応についてのより厳密な検討が必要である。

(2) については、一般に、文章の様式として、「論理的文章」と「文学的文章」とが区別され、場合によってはこれに「実用的文章」(日常的文章)が加えられる。こうした文章様式の違いと叙述のあり方のかかわりが問われなければならない。土部が基本的文章様式として「論論文・実証文・解釈文・記述文・評価文・形象文・表出文」の七つを数えたことは先に述べたが、これらが純粹に「単文章」のまま文章作品になったり、また、「単文章」どうしが並びあったり融合したりして

「複文章」として文章作品になったりする場合の叙述層の特性が検討されなければならない。土部があげた七つの基本様式のうち、「論究文・実証文・解釈文」を主脈とするものは、論理的文章を成立させ、「形象文・表出文」を主脈とするものは、文学的文章を成立させ、「記述文・評価文」は、いずれの様式の文章作品も成立させる、という関係にあると見られる。こうした見通しのもとに、「単文章」を特徴づける叙述層のありさまと、それが並びあったり融合したりして成立する「複文章」としての文章作品の叙述層のありさまとを検討し、比較することが、叙述面から見た各文章様式の特性を浮かび上がらせることになる、と期待される。

(3)のうちで「視点」と叙述層のかかわりについては、土部にも多くの考察が残されているわけではない。叙述における視点については、従来、文学作品の表現技法の問題として、語り手と登場人物とのかかわりが問題にされてきた。そして、視点が作品世界の内部にあって、第一人称で物語る「一人称視点」、視点が作品世界の外部にあって、人物が第三人称で登場する場合を「全知視点」「制限付き全知視点（三人称視点）」「客観視点（劇的視点）」と呼んで区別してきた。

今井文男は、原視点からレフされたり、レフが繰り返されたりした配賦視点が語句・構文の選択・配列を決定するという、独自の表現論を展開している。たとえば、谷崎潤一郎の「春琴抄」は、(1)「私」による語り、(2) 仮構された『鵺屋春琴伝』の引用、(3) 近代小説文体による事態描写、の三層の異質な叙述が並置されたり混在したりして作品が成立している。

こうした作品における視点の配賦と叙述層の関連が検討の対象となろう。

また、宮沢賢治の「畑のへり」という童話作品では、作品冒頭に置かれた事態描写の地の文のあとは、二匹の蛙が対話する談話描写が作品の末尾近くまで続くのだが、その内容は、読者の意表を突くものである。天沢退二郎は、賢治童話のうち、擬人化された小動物が登場する作品を比較しながら、「たとえば『やまなし』や『蛙のゴム靴』における蟹や蛙の視点から見える世界が、私たち人間の視覚体験によって無理なく想像しうるものである（ように少なくとも思える）のに対し、この『畑のへり』は、およそ擬人的童話が暗黙裡に了解しているそうした視界の擬人性とでもいうべきものを基本的にぶちこわしている。」と述べている[天沢1985]。

これらは、題材の処理のしかたが、特異とも見られる視点の設定につながる場合だが、こうした視点の布置についての検討が求められる。

[引用参考文献]

- 土部 弘(1954)『文章理解の基礎』昌文社
土部 弘(1973)『文章表現の機構—国語教育の実践原理を求めて—』くろしお出版
土部 弘(編著)(1990)『表現学大系 各論篇第27巻 論説・評論の表現』教育出版センター
土部 弘(編著)(1992)『文章読解・表現スキルブック』国語表現研究会
土部 弘(1961a)「構成の型—文法的文脈の在り方—」『学大国文』4

- (1961b)「文脈と構成(一)」『国文学』(関西大学) 30
- (1961c)「文脈と構成(二)」『国文学』(関西大学) 31
- (1962)「文章の展開形態—〈文脈〉と〈構成〉—」『国語学』51
- (1964)「連句と連文(一)」『学大国文』7
- (1965)「文章の基本様式」『国文学』(関西大学) 39
- (1966)「連句と連文(二)」『学大国文』10
- (1968)「〈話題〉と〈主題〉」『学大国文』11
- (1969)「文章における文脈のなりたち」『表現研究』9
- (1971a)「現代文法・文関係論」『講座正しい日本語5』明治書院
- (1971b)「文の関連的地位」『学大国文』14
- (1973)「総叙と細叙」『学大国文』17
- (1975)「文章表現論の方途」『表現研究』22
- (1976a)「叙述層と文章構成」『表現学論考』
- (1976b)「読解力と表現力」『現代作文講座7』明治書院
- (1978)「事態描写の叙述層」『学大国文』21
- (1985)「文の機能と文章の叙述層」『国語表現研究』2
- (1986)「言語空間の仕組み—文章表現の叙述層と構成—」『表現学大系 総論篇第1巻』教育出版センター
- (1988)「口語文法の課題・文論」『日本語学』7-8
- 天沢退二郎(1985)『「畑のへり」解説』『宮

- 沢賢治全集7』ちくま文庫
- 今井文男(1961)『表現学仮説』龍二山房
[のち、法律文化社1968]
- 西郷竹彦(1968)『教師のための文芸学入門』明治図書
- 中島一裕(1983)「言語の階層と叙述の層序」『青須我波良』(帝塚山短期大学日本文学会) 26
- (1994)「文章分析のための文類型について(1)」『帝塚山短期大学紀要』31
- Yu. ロトマン(1979)『文学と文化記号学』岩波書店

[付記] 本稿は、第50回表現学会全国大会シンポジウム「表現学説を見直す」において報告した内容にもとづいている。シンポジウムでは、表現学説の紹介に終始するのではなく、今後の表現研究の進展につながる内容を中心にすることが求められていたことから、土部表現論の体系について十分に言及できなかったところがあるかと思う。宥恕を乞いたい。

(帝塚山大学)